
水蜜桃の在処。

林野雛子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

水蜜桃の在処。

【Nコード】

N9875A

【作者名】

林野雛子

【あらすじ】

愛しくてたまらないのに素直になれない女。愛しくてたまらないから曝け出す少年。岡倉小夜子、二十七歳。浅野鷹臣、十七歳。愛情の歯車は本当はいつでも噛み合っている筈なのに……。『楽園までピクニック。』『Kitty Darling』をきっかけに某ヘタレ暴走駄文作家Mと某オトナエロリスト作家T様の電撃コラボレーション。

岡倉小夜子さんは僕の大切な女性。^{ひつ}
恋人と呼んでもいいと思う。
恋しい人だから。

愛しい人なら、愛人？

でも愛人って影っぱい。
陰気臭くてイヤらしい。

でも、結局、僕は小夜子さんの愛人なのかもしれない。
逢うときはいつも小夜子さんの部屋。
することは続かないお喋り、デリバリーの食事、僕だけが狂ったセックス。

愛人どころか室内犬あるいは家猫？
家のなかの小夜子さんしか知らない。
外で何をしているか僕は知らない。
知っていることは……、

岡倉小夜子、二十七歳、会社員、性感帯は首筋、胸、横腹、内腿、
×××××。

いっぱい探して見つけた。あと香水を集める事が好き。
……充分のような気もするけれど、やはり足りない。一緒にいるときの小夜子さんは笑うのも怒るのも呆れるのも半分くらい。

でも、素肌を重ねればその時だけは、全てを見せてくれるような気がして、僕はいつも必死になって彼女をこじ開けようとする。

ねえ、僕のことスキ？

いつもの僕の質問に彼女は少し困ったように笑って、答えてくれる。

大好きよ？

食べちゃいたいくらいに。

その台詞に僕は溶けてしまい、脳みそ、頬、口元に締めりがなくなる。

けれど、時計の針が一周する前に不安が首をもたげてくる。

もしかしたら、僕がうるさいから仕方なく言ってくれているのかもしれない。

そんなのはイヤだ。

そう思つて、気づけば、彼女のシルクの裾をひっぱっている。

そんなとき決まったように彼女は少し笑って冷凍庫から、英語でレディなんたらと書いてある大きなカップに入ったアイスクリームを持ってくる。

僕はシチューをすくう大きなスプーンでそれを食べる。

食べている間は静かだから。

半分近く食べてると濃厚なヴァニラに胸焼けがしてくる。

僕はフローリングの上にそれを置き去りにして、彼女の膝を枕に寝転がる。

暖かな陽だまりの中で僕はやはり猫のように怠けている。

だけど、僕は彼女が外でどんな顔をしているのか知りたい。

僕のいないところでも、彼女は生きているはずだ。

僕は彼女がいなければ、生きながらに死んでいる。みたいになるけど。

夜の七時半。小夜子さんが入浴している間に、僕はバックの中を探った。

机の上にあつた割り箸の袋に会社名と住所を控えた。夜八時に僕を家に帰らせる。明日は日曜日だけど、小夜子さんは出勤だから。学生は勉強もしないとダメよっていいながら僕の背中を押して部屋を追い出す。

僕の肩書きは高校生兼小夜子さんの家猫。

チャリを漕ぎながら、小夜子さんの体温を思い出して途方に暮れる。少し肌寒くなった今時期、余計に恋しくなる。

明日、僕はジェイムス・ボンドよろしくイカしたスパイになって、あるいは、工藤ちゃんのようにクールなハットをかぶった間抜けな探偵になって、彼女の素行調査をする。

そして、お昼時になったら予告状を携帯に送る。

“あなたとあなたのお昼休みをいただく。”

次元も石川もないルパンだけど、フジコちゃんはいから充分。

高級フレンチやイタリアンのランチなんて難しいかもしれないけれど、ちょっと小洒落たカフェで甘いものくらい、ご馳走するんだ。

いや、待てよ？

帰りに待ち伏せしてサプライズなんてものも楽しいかもしれない。

僕はいろんな想像をする。

小夜子さんは満面の笑みで自分は得意気。

冠婚葬祭用にもらったポール・スミスのスーツを着たら、僕だって高校生には見えないと思う。

小夜子さんが喜ぶだろうとしか考えていない僕は、自分に都合のいいよう想像ばかりして、一人でニヤニヤしているだった。

アイ・ドンノウ・テスト・キャラメリゼ オン ザ パンケイクス……

鷹臣編担当、M本です。T先生に無理言ってしまいました。激謝。

ロンリー ハーツ エイト キャラメリゼ オンザ パンケイクス。

ねえ、僕のことスキ？

今日何度目かの、いつも通りのお決まりの質問。

私の困った愛しい仔猫ちゃん。

そんなに本当の私を知ってどうするつもり？

これ以上、あなたに溺れたら、息なんてもう出来ない。

大好きよ？

食べちゃいたいくらい

馬鹿な私。

そんなこと言って、いつも自分がそうしてほしくせに。

意地っ張りで、素直じゃなくて

あなたより10も歳上で。

生徒手帳の中でまで笑うあなたにこんなにも嫉妬してる。

その笑顔は、この閉ざされた空間では私だけのものなのに。

浅野鷹臣

名前を見ただけで背筋に走る甘い痺れはあなたを愛しすぎた証拠。

でも教えない。

そうしたら私の優先権はなにひとつなくなってしまう。

教えてなんて、あげないんだから。

私があなたの海で溺れて、理性を保てなくなるまで。

それくらいいいでしょう？

どうせ、そんなに時間は掛りやしないのだから。

いやらしい、サヨコさん

もっと、僕のせいでいやらしくなって？

シルクの下着に舌を這わせるあなた。

私の取り柄は一体なんだろう。

あなたはどうして私と一緒にいてくれるの？

あなたが私を少しずつ味わい始めると、必ず浮上してくる気持ち。

甘美な舌遣いは、女性の感度を知る為の『実習』なのかしら？

練習代の私はもう、狂うほどあなたを欲しているというのに。

こんなに綺麗で、真っ直ぐで、壊れちゃいそうなほど私に情欲を注ぐあなたにこそ、私はいつも訊きたいと思ってる。

その言葉は空気に触れることなく、いつまでも私の中に残って、や

がてふやけてもとに戻れないほど膨らんでゆく。

それでも私は口に出来ない。

こんなひとことであなただを失うかもしれないと思う私は、あなたの前では大人の女でいなくちゃならない。

あなたとのセックスがどんなによくても

あなたの愛撫がどれだけ私をおかしくさせても

あなたから香るヴァニラのニオイが私を誘惑しようとも

これだけは口に出来ないのよ？

ねえ、私のこと愛してる？

毅然とした大人はそんなことを口走っては決していけない。

だから私はあなたの背中を夜8時きっかりに押す。

そうしないと、私は陸に上がれなくなる。

満ち潮の時刻は、刻一刻と迫っているのだから。

あなたがいなくなった私の部屋は、甘ったるいニオイだけを残して、私を掻き立てる。

口にしてもし足りないあなたの代わりに、私はうんと甘いパンケーキを食べる。

あなたの温もりが残っているような溶けかけのヴァニラアイスクリー

ームと、ほんのり苦味のあるカラメルソースをたっぷり垂らして。

ヴァニラアイスはあなた
カラメルソースは私。

まるで私達みたいなそれらをパンケーキにうんと絡ませて、ひとくち口に運ぶ。

口の中に広がる味は、想像通り甘ったるくて、でもあなたの甘さには敵わないと思った。

水飴海に沈ませて。（前書き）

あなたは僕の海、とろとろの海水に、僕を沈めて。

水飴海に沈ませて。

散々考えて結局は彼女の帰りに迎えに行くことにした。

疲れたアフター・ファイブに忠犬八公の顔でも見ればいくらか元気になってくれるだろう。

それにお昼じゃ時間も少ないし、夜なら、そのまま、小夜子さんの部屋に行ってお泊りなんか……。

いや、どうだろう。小夜子さん部屋に泊めてくれたことないし。ラブホでさえ行かない。

お泊りなし、僕だって八時間くらい腕枕するくらいお茶の子だ。もしかして遊ばれてる？

十歳下だし、ガキだし、しつこいし。すぐセックスしたがるし、それってやっぱりウザイ？もしかして別居中の旦那さんがいるとか？うわぁ、最悪。

家に帰り着くと、なにも言わずに部屋に直行して、クローゼットの中からカバーに入れられたスーツを取り出した。

黒地に細いストライプ入りの洒落たスーツ。

そろえて買ったレザーソールにネクタイ。

そんじょそこらのイケ面リーマンには負けねえぜ。

もしかしたら小夜子さんもスーツ姿の僕を見なおしてくれるかもしれない。

僕は一人でスーツを片手にガッツポーズを決める。

是非脱がされたい。ブルガリのブルーでもふっつていこうかな。

ネクタイ外されるときに、香くらいに。

たまには小夜子さんを悩殺したい。

変装はスーツに決まりだ。

そんなことを考えていると携帯が鳴った。

メールだ。相手は唯一の友達、井川 真夜。真夜は女の子だが、両刀で、いわゆるバイセクだ。

今、十歳年上のキャリアウーマンと付き合っているらしく、僕とよく話が合う。

僕らが仲良くなったきっかけはやはり、年上の“彼女”持ちってところと、他人に対する興味が極端だったところ。

【明日、あんた暇ならちょっと出てきてよ。十二時にスタバで待ってるから】

すげえ自己中なところも似ている。

苦笑しながら、メールを返す。

【夕方までなら付き合うよ。またトークさんともめたの?】

送信してすぐに小夜子さんにメールを打つ。

【明日、仕事何時まで?】

送信しようとしたら電波が悪くなり、送信できなかった。

代わりに真夜からのメールが受信された。

【明日話す。遅刻厳禁】

まったく自分本位だ。

未送信メールボックスからさっきのメールを小夜子さんに送信した。

小夜子さんの返事はいつも、なかなかこない。

風呂に入って、センター問い合わせ。

飯食って、センター問い合わせ。

受信したと思えば、未承諾広告。無視してセンターに引っ掛かっていたヤツが来る。

明日の朝、返信きてたら、いいのにな。

そう思いながら僕は眠れないのに布団にくるまる。

小夜子さんの柔らかな肌を思い出す。

しっとりとした感触。

同年の女の子にはない成熟されたなめらかさ。

ハリがどうこうじゃない。はねかえせばいいってもんじゃない。

あんなものは女性にしか解らない。……たぶん。

吸い付くような柔肌はよくなめされた革より上質で、はねかえすことなく受け入れてくれる。

熟れた身体の奥に、僕の衝動は溶かされて夢中になってたら、脳天から腰に快樂の稲妻が落とされる。

身体の相性が良いつてこういうことだろうか？

眠れないなら、と僕を唆すように脈打つ愚息。

情けないやら腑甲斐ないやら恥ずかしいやら、いろいろ自分に言い訳しても、結局、鮮やかに刻まれた小夜子さんの記憶にのまれて、僕の右手は禁忌を犯し始める。

“ 原始、女性は太陽だった。”

社会の授業中に、出てきた日本の元祖・ウーマン・リブ平ナントカ
らいてうさんは言った。

しかし、小夜子さんに溺れている僕から言わせてもらえば、

“ 常時、女性^メは海である ”

二束三文にもならない格言を呟き、僕はうつらうつらする。

太陽ならば、僕のアマテラス、早く岩屋から出て、僕にメールをく
ださいな。

携帯片手に、僕はいつのまにか眠ってしまっていた。

水飴海で、漂流。（前書き）

あなたの海からあがれない。絡みつく水はあなたそのものだから…

水飴海で、漂流。

どうしよう…

体が、動かない……

このままじゃ

沈んじゃう！！

夢から醒めた体には、じつとりと汗が滲んでいた。

今みたばかりの悪い夢と現実の不快感を洗い流す為、昨晚の気怠るさを引きずったまま、のろのろとバスルームへと向かう。

シャワーのコックを捻ると、少し熱めの湯が私のぼんやりとした思考を刺激する。

湯は当たり前だが、さらりとしていて、さっきまで私に絡みついていた粘着質な液体を洗い流してくれている様だった。

水飴の、ただっ広いだけの海。

私だけが存在する、どろりとした海。

もしかしたら他に誰かいたかも知れないけれど、その姿は沈んでしまったのか、見つける事は出来なかった。

いつの間にかその海に浸り、身動きが取れないでいた私は、ただ漠然とした不安に駆られ、助かりたいけど此処に留まりたいという矛盾

盾した気持ちで、自由を奪われ、甘んじていた。

おかしい夢……

再びシャワーのコックを捻り、湯の放出を止めると共に、夢も一緒に封じ込めた。思っていた。

しかし現実には覚えのない、そのねっとりとした感覚は私の躰から取れる事はなく、何時までも纏わりついて、忘れさせてはくれなかった。

まるで昨日の鷹臣だわ

そう思った殺那、昨晚充分愛された筈の躰は反応して、瞬時に熱を持つ。

それは今浴びたシャワーのせいなんかではなくて、間違いなく、彼の仕業だった。

いや、言い訳をする私こそ、その犯人かもしれない。

いやらしい私。

本当は何時までもあなたをこの体内にすっぽり包んで、収めていた。

い。

けどね？そう思う度にちらつくのよ。

みたこともない、あなたの隣にいる女子高生が。

私の知らない、あなたに熱い眼差しを送る健気な女の子が。

海に動きを封じられた私は、ただ沈んで、その風景を眺めるだけ。

なんて寂しいのかしら？

なんて愚かなのかしら？

それでも、この海に沈む心地よさを知った私はそのうねりに抵抗もせず、埋もれゆくだけ。

そして、この海の感覚は一生消える事なく、私の官能を擦るのよ？

ほら、今でさえ、こんなに……

昨晚鷹臣を埋めた部分から、鷹臣の分身のような海の雫が流れ出た。もしかしたら私自身が作り出した雫かもしれないが、そんなことはどちらでも良かった。

だって、結局のところ、同じ液体なのだから。

何とか気を取り直して、私は再びシャワーを浴びる。

昨夜の出来事を思い出せばきりが無いし、家を出る時間も押し迫っていた。

私はバスルームから飛び出し、簡素な身支度を整えて玄関まで急ぐ。

「あつ」

思い出したように慌ててドレッサーに戻り、フレグランスを空中にひと吹きした。

その香り雨を浴びながら、足首にもひと吹きする。

舞い戻った玄関で携帯を開き、昨日保存しておいたメールを送信、パンプスをつっかけるようにして履いて慌てて家を後にした。

【日曜出勤だから定時に終わると思います。】

強がりの私の返信と、鷹臣のお気に入りのベビードールの香りが主不在の部屋に、まだ色濃く漂っていた。

水飴海で、漂流。（後書き）

遅ればせながら、小夜子担当、林野雛子の片割れです。美しき純愛（卑猥の間違い）を描くべく、全力で頑張ります！

エスプレッソ キス ガールフレンド

【日曜出勤だから定時に終わると思います。】

お帰りアマテラス。

今日の僕の天気は曇りだよ。あなたがそっけないからさ。

……定時って何時のことだろう。オトナ用語で五時くらい？

そんな質問したら、あなたは余計に僕を子供扱いするだろうか。

……聞かないでおこう。

サプライズだ、サプライズ。

【それでは定時にあなたのハートをいただきに参ります。b y・ル
パン四世】

- 送信。

はん。

どうせガキだよ。バカだよ。くだらないよ。

でも、マジであなたのハートをいただきたいのさ。

朝の十時、僕はベッドの上で上体を起こしてさっそく携帯をいじっていた。

【新着メールあり】

その表示に僕はマッハで覚醒したのに、内容ときたら事務的で本当に僕は彼女に愛されているのかと疑ってしまう。

食べちゃいたいくらい好きってやっぱりカラダ目当て？僕だってそうだけど、深く突き上げていたら、ココロにまで響いてくれるかも知れないと期待してるんだ。

小夜子さんのような大人の女性と付き合えるなんて奇跡みたいなものだから、愛想尽かされないように、頑張ってる。でも寝てるだけじゃ、飽きられそうでイヤだ。

僕は毎日でも彼女を抱いていたいけれど、たまには街をぶらついて、公園のベンチでテイクアウトしたコーヒーかなにかでお茶して、手作りのお弁当でランチとかアウトドアなデートもしたい。小夜子さんって生活感ないもんなあ。

まあ、それはさておき、ランチのあとはスーパーマーケットで買い物だろ。

一緒にカレーとか作りたいな。

カレー粉の他にガラム・マサラ、ターメリック、レッド・ペッパー割り増しで。皮剥きなら、僕だって手伝えるし。

小夜子さんが作ってくれるなら人參だってちゃんと食べる。そんなのじゃダメなんだろうか。

逢いたい。今すぐ

僕のカラダは、ココロは、すでに禁断症状を訴えはじめ、どうしようもない焦燥感ばかりが胸に焼き付く。

掻き毟るばかりが、僕の表現方法なのか？

どうしようもない苛立ちばかりが胸に募る。

こんなの知らない。

こんな思い、感じたことない。

まだ、目覚めたばかりなのに、寝起きでこんなのってないよ。

神様、これが恋なら、なんの罰ですか？

僕は苦しくて、胸が壊れそうです。

今まで蔑ろにしてきた、感情よりの罰ですか？

こんな感情ならば欠落したままでよかった。

僕が、再び枕に崩れ落ちたときメールがきた。

- 真夜からだった。

あまりにも期待外れで、僕は携帯を布団に投げつけて完全に覚醒した。

運命の女【ウンメイノヒト】は今頃、電車に揺られているか会社という鳥かごに捕われてしまっているのだ。

ただでさえメールの頻度がワーストランクなのに、そうそう送られてくるはずがない。

【早く来てよ。あたしもうついた。退屈。世界が無駄な晴天だから。雨でも降っていれば皆、水の心なのに。】

【知るか！エスプレッソでも飲んで目え覚ませ。オマエのポエムに

付き合ってられつかよ】

- 送信。

全然意味わかんねえ。

水の心ってなんだ。

僕がベッドとおサラバしようとしたときにまた受信した。

【クソツタレ】

僕は罪のない携帯を再び投げつけ、部屋をでた。

家族はすでにいない。

僕は身仕度を整えて、スーツに着替えた。

姿見のなかの僕は、やはりフレッシュマンによくあることで、なんとなく、ちぐはぐな感じた。

スーツに腰パンはダサイので、きちんとベルトをしめた。親父のだけどエルメス。ネクタイはアルマーニ。艶男を目指すなんておといきやがれクソ中年。

僕にくれ。

どうせならと、トラサルディの革靴まで拝借して、僕は仕上げにブルーをふった。

嫌味なくらいブランド志向。ブランドのチャンポン。逆に吐き気がするほど、ダサイが小物にちりばめたということで許してもらおう。まあ、しょせん高校生だから。

しかし、姿見のなかの僕は高校生には見えない……と思う。

ウーノのファイバーインムースで、猫っ毛をパーマ風に整えた。

よっしゃ！初ご出勤！！

僕は意気揚揚と家をでた。

今から逢うのが小夜子さんじゃないってところがイマイチ腑に落ちないが、仕方ない。

定時まで真夜の愚痴に付き合っただけでやるしかないなあ。僕はさっそく欠伸をした。

駅は家から徒歩五分。電車にゆられて十分。十一時半には待ち合わせのスタバについた。

黒いベリーショートに肩のでた細いボーダーのカットソー、デニムの短いスカート。

それが真夜だって事は一発でわかった。

退屈そうに頬杖をついて、コーヒーを持て余し、未成年のくせに、指にはさんだ細いタバコがこなれている。

「鷹臣！？なにその格好！」

真夜は僕に気付くと素っ頓狂な声をだしてタバコを落とした。

「似合う？夕方から小夜子さんを迎えに行くんだ」

「いいんじゃない？最近よく見るよ無駄に洒落たリーマン。麻のストゥにハットなら、ミシエルみたいだったのにね」

「程遠いな。ミシエルならもっと無造作でスマートに決めてるよ。真夜もサブリナパンツなら、パトリシアだったかもね」

「ふーん、お世辞でも嬉しいわ。記念にキャラメルマキアートご馳走してあげる」

「なんの記念？」

僕は脈絡のない真夜の好意に苦笑した。

「まがい物にもなれなかった記念よ」

「なるほどね」

椅子に腰掛けながら、僕は頷く。

彼女が教えてくれたフランス映画の渋い物憂げさには程遠い街並み。背中のはくろを見送りながら、僕のパトリシアは小夜子さんだけだね、と舌を出した。

戻ってきた彼女がくれたのは、生クリームとキャラメルに潜んだ苦いコーヒ―。真夜はトーコさんとの愚痴とのろけを僕に話して聞かせる。

片手間に口に含んだ液体の甘さに続く苦味に、突然、小夜子さんのキスが欲しくなって、思わず、僕は一人で狼狽えた。

「どうしたの？」

真夜が眉間にかかる皺を寄せて僕を覗き込む。

キスに近い距離に僕は少し顔を下に向けた。

「どうしようもないんだ。気がつけば、小夜子さんのことばかり考えてる。でも、どうしようもないからイライラしてくる」

「バカじゃないの。それが恋してるって事でしょ？あーもー、当たり前なこと言わせないでよ。くだらない」

くだらないか？

僕にとって小夜子さんから発展していく焦燥感と苛立ちは大問題なのに。

「そんなときは爪を噛む真似でもしてればいいわ」

「真似？」

僕が顔を上げると、真夜は首を横に傾けて悪戯っぽい笑顔を見せた。

「本当に噛んでるとなくなる」

軽く唇が触れた。

「なにすんだよ」

僕は手の甲で自分の唇をこすった。

「あ、傷つくなあ、それ。つい二カ月くらい前までもっとスゴいことしてたじゃない？あたしたち」

「忘れた。こんなことするなら、もう逢わない」

「鷹臣、変わった」

「恋を知ったからね。前みたいに無駄なことしてる余裕ないんだ」

僕は財布から千円札を二枚出して席を立った。

「頭冷えたら、連絡して。二度としないって誓ってくれたら、また逢おう」

そう言った僕を真夜はつまらなさそうに頬杖について見上げている。

「もう二度と逢えないかもね」

「冗談だろ？友達じゃないか」

「冗談よ。ばいばい」

真夜はにっこり笑って手を振った。

僕はわざとそれを無視して走って小夜子さんの会社に向かった。

まだ、十二時を少し過ぎたところだった。

広場のような公園の時計をみて、僕は溜息を吐いた。水のみ場で唇を何度もこする。

ハンカチを取り出そうとポケットを探り、ようやく気づいた。

携帯を忘れてきた。

しかも、さっき真夜に渡したのが今の僕の全財産だった。

レイス ワンズ エスプレッソ ウィズ ユー（前書き）

退屈な毎日に、少々の甘味を。

レイス ワンズ エスプレッソ ウィズ ユー

何これ……？

私はフジコちゃんなわけ？

いつもの不可解でおかしなメールが、やっと正常に働きだした私の脳内を冒して、『吹き出し笑い』という行動を命令する。

平日と比べ、駅のホームはまばらにしか人が居なかったが、それでも、直ぐ側にいる中年男性に怪しまれない様に、小さく咳払いをして口許を慌てて押さえた。

鷹臣はほんの少しの幸せを、毎日毎日、欠かさず私に与えてくれる。

閑散とした車内の一番端の席に座り、手摺に頭を預けながら、私の中での鷹臣というものの存在について考えてみる。

実に単調で、実に平淡な、取るに足らない我が人生に、彼の存在はほんのりと甘い味付けをしてくれた。

それはなくてはならないモノでは決して、なかった。

例えるなら、そう、ソーダフロートの上で申し訳なさそうにしているミントの葉、コースで食事をした時なんかに出てくる、デザートあの繊細な飴細工の器、そんな素敵なオプシヨンみたいなものだった。

けれど今は違う。

私にとって鷹臣は、絶品のアイスクリームの中に細かく刻まれたヴァニラビーンズであり、スパイスクッキーの、あの舌を心地よく刺激する、ナツメグみたいなものになっていた。

詰まるところは、それなしでは何の意味も成さないという事。

ヴァニラアイスに人工的な香りを加えても、スパイスクッキーに見当違いなスパイスを加えても、そんなのって、やっぱり違う。

どれだけ似たものを差し出されても、本物の味を知ってしまった私には通用しない。

紛いものなんか、いらない。

欲しいのは、私の人生に本物の甘さを注いでくれる、鷹臣だけだから。

27にもなってこんな乙女チックな思想に嚙りついている自分に、我ながら驚き、少し恥じた。

熱くなった頬を隠すように両手で覆い、俯いていると、扉の開閉音と共に大きな足音が聴こえた。

その音に反応して顔をあげると、目の前の美少女があるまじきポーズで腰を下ろしたところだった。

ミニのブルーデニムスカートから伸びる長い足を、下着が見えてし

まう事も臆せずに組んで、ドクターマーチンの重みで少し反動がついた足先をぷらぷらとさせていた。

痩せた肩が覗くボーダーのカットソーを着た彼女は、まるで外国のファッション誌から飛び出してきたような抜群のルックスで、その素行の悪さが不思議と板について、こちらに不快感を与えることは全くなかった。

馬鹿みたいにその彼女に見とれてしまった私は、不意に彼女と視線があった気がして、解らないように慌てて視線を反らす。

何駅も乗らないうちにそのモデルみたいな彼女は、乗車した時と同じように大きな足音を立てて下車していった。

彼女の後ろ姿を走りゆく車内から見送り、まるでシャム猫が歩いているような可愛らしくてセクシイなその姿に再び見とれてしまい、鷹臣にはああいったコが本当はお似合いなのかも…と余計な嫉妬をする。

彼女の若々しいベリーショートと、鷹臣の柔らかな猫っ毛に想いを馳せ、私はまた、醜い何かに心を蝕まれてしまっていた。

悶々とそんなことを考えていると、アナウンスで私が下車する駅を告げられ、急いで髪を纏め直した。

忙しい動きで私は鞆から携帯を取り出して、メールを打つ。

【じゃあ楽しみに待ってます。時間になってもさらってくれないのなら、私があなただを奪いに行きます。】

ふふつと笑みを零して送信ボタンを押した私は、まさか彼の予告が本気だったとは、これっぽちも予測していなかった。

オフィスにつくと、まるで平日のように通常業務と何ら変わりなく過ごしていた。

仕事といっても所詮私は事務専門。

休日返上で忙しく働く人達のサポートみたいなもので、要するに、コピーしたり、簡単な書類作成をしたり、煮詰まったコーヒーマーカ―を取り替えたりするくらいなものだ。

勿論、残業など必要なく、定時を迎えた私は残った人達のために最低限のモノを用意して退社する。

鷹臣に会いたい。

下りエレベーターを待つ私は急に寂しがり屋になって、携帯を手にする。

メールは来ていなかった。

周りに人が居たら聞こえてしまうくらい大きな溜め息を吐いて、丁度来た無人のエレベーターに乗り込む。

「ちょっと待って!!」

乗り込んで直ぐ、閉ボタンを押した私は慌てて開ボタンを連打して扉を開けた。

「俺も今日は帰るんだ。岡倉さん、途中まで一緒に行こうよ?」

乗り込んできたのは同じ課の平井さんだった。

断る理由も無い私は黙って頷き、片手に持ったままの携帯を今一度ちらりと見た。

鷹臣からのメールはやっぱり、なかった。

アイアム プア トーイ(前書き)

僕はあなたのオモチャでいい だから お願い ちゃんと僕
で 遊んでよ。

アイアム　プア　トリー

時間って、いろんな意味で残酷だ。

帰ることも出来ない。

電車賃がないのを言い訳に小夜子さんの家に泊まろう。

明日、学校は創立記念日で休みとか言って、休もう。日曜出勤したなら振り替え休日があってもおかしくないはずだ。

僕は忍耐力を駆使して日暮れを待っているところだ。

真夜はいつも訳が分からない。

小夜子さんのことを考えながら、いつのまにか真夜の事まで考えてる。

トリーさんとうまくいってないからって僕にちよつかいだすなんて信じられない奴だ。

どうせトリーさんと仲直りしたら、僕に見向きもしなくなるだろうけど。

だいたい今更なんであんなことを……。

僕は真夜に偏ってしまう思考を一時停止させ、目の前に意識をやった。

さすがオフィス街だけあってスーツ姿の人がたくさん行き交っている。

くたびれたおっさんや、アブラギッシュなおっさん、束の間の休息にお喋りに夢中になるOLたち。僕よりスーツをスマートに着こなしたリーマン。

あと二年もしないうちに僕も当たり前のようにスーツを着ているん

だろうなあ。今は着慣れないから浮かれてるけど、毎日だと飽きるよな。

やっぱり退屈なので、僕は小夜子さんのオフィス近くのコンビニで立ち読みしていることにした。

そうとうねばってやっと四時になった。

ここまでくればあと一、二時間くらいあそこの木陰のベンチで待っていよう。

そこは出入口から見える場所で、距離はあるものの、僕が小夜子さんを見落とすはずがない。

小夜子さんが分からなくても、こちらから声をかける。

キャッチの真似をするか、ナンパの真似をするか、僕は登場の仕方を必死に考えた。

ようし、“アナタハあ、神うヲ、信ジマスカー？”にしよつと。笑ってくれるかな。

それとも呆れて無視かな？

こみあげてくる笑いを押し殺しながら、僕は小夜子さんがくるのを待った。

日が暮れていく。

僕のココロはこの国と反対に期待の兆しが、射してくる。

早く逢いたいな。

小夜子さんとキスがしたい。

キスをしたら、小夜子さんのスーツを脱がせて、僕のスーツも脱がしてもらうんだ。

アウトドアのランチはもういいや。

外は飽きたし、少し身体も冷えたから、暖かな小夜子さんに抱いてもらいたい。

一緒にお風呂に入りたい。『お疲れさま』って言って僕の手で彼女を丁寧に洗ってあげるんだ。

まあ、その後、結局、もっと疲れさせちゃうんだろうけど。

本当、僕は忠犬だ。

ヤキトリの為じゃなく、ご主人さま本体を待つてるんだからね。

すこしの妄想の合間に、携帯が気になる。

もしかしたらなにか返信が着てたかもしれない。

小夜子さんはなかなか返信してくれないけど、僕はいつもすぐに返信するから、心配してるかもしれない。

溜息を吐いてふと顔をあげると、まとめ髪の女性がビルから出てきた。

僕が見落とすはずがない。あれは確かに小夜子さん。普段は髪をおろしているけど、まとめ髪もいいな。

そう思つてよくよく見てみると隣にスーツの男がいた。

背が高く、僕から見てもカッコイイと思えるし、僕よりスーツが板に付いている。

しかも、小夜子さんは楽しそうな笑顔を見せた。

僕の胸の中が凍りつく。

あんな笑顔見たことない。

立ち上がるうとしても、身体が動かない。

もしかしたら、僕はただの彼女のおもちゃなのかもしれない。

やっぱり、大人同士が、しっくりきてる。

あきらめに似た感情がよぎってすぐに、隣の男を殴りたくなった。

なんでお前が隣なんだ。

なんでお前が小夜子さんを笑わせてるんだ。

僕は拳を握つてこみあげてくる安価な憎しみを押さえた。

たまたま……だよな。

早とちりだ。

そう自分にいい聞かせてみるが、一度感じた怒りが拭えない。

小夜子さん、僕はあなたのおもちゃでいい。

だから、僕にも、笑顔をください。

そしてちゃんと僕で遊んで。

祈るような気持ちで、彼女を見つめた。

ああ、僕はなんて惨めなおもちゃなんだろう。

カルアミルク・アイズ

「こんな風に話すのは初めてだよね？」

平井さんは、閉まったままのエレベーターの扉を見つめたまま、そう洩らした。

鷹臣より少し高い身長の手井さんは、歳がひとつしか変わらないのに、何歳も歳上に見えて、とても男性的な雰囲気醸しだしていた。

女子社員が密かに狙うこの標的は、微かにブルガリブルーの香りを漂わせて、私の鼻孔を攪る。

手井さんの体温とブルーの混じりあった香りは本当に色っぽくて、思わずよろりと腰が砕けてしまいそうな程だった。

「日曜出勤なんてふざけるなと思ってたけど、僕は案外ラッキーかもしれない」

到着の合図と共に私を誘導する手井さんの奇妙な発言に、私は僅かに首を傾げ、軽く会釈してからエレベーターの外へ出た。

「岡倉さん、付き合ってる奴、いるでしょ？」

「ハッ！？なんですか…？」

「いや、なんでも。失礼かもしれないけど、岡倉さんっていつも雌の匂いを撒き散らしてるから。」

まったく、何てことを言う人だろう。

最初の質問にしたって、あんな断定的な物言いで質問してくる人間はまずいない。

いや、いるかもしれないが、あまり話した事のない相手に使う口調ではないだろう。

普通なら傲慢な人間に思われて接触を避けられるのがオチだ。

それなのに、この人ときたら、微塵もそんな風に感じさせることなく、さらりと言つてのけるのだから。

これはきつと、平井さんの人徳なのだろう。

続いて述べられた失礼な発言も、本来なら怒ってしまつて口もきかずに終わつてしまいそうなのだが、事、彼に関してはそんな気持ちには湧いてこなかった。

それどころか、彼の一風変わった表現に思わず笑いが込みあげてきて、我慢出来ずについ吹き出してしまふ。

「平井さん…そんなこと女性に浴びせる言葉とは到底思えないんですけど。これから意中の方とお話する場合はくれぐれも気を付けた方がいいですよ？」

笑いを堪えながら平井さんに忠告すると、彼は目を見開いてから空

を仰いだ。

「時既に遅し……か」

平井さんがぼつりと呟いた声が聞き取れず、思わず彼の方に顔を向ける。

ほんの、一瞬だった。

普段なら、人の顔に視線を移す合間に見る景色など、特別な印象を残して目には入らない。

けれど私は感じたのだ。

とてつもなく甘くて、苦味の混じった、溶けてしまうような視線を。

私とその熱の方向に恐る恐る視線をやると、予想通りの対象がそこにはあった。

「平井さん……ごめんなさい。私、急用が出来て…お疲れ様でしたっ！また会社でー！」

平井さんが私に驚きの表情を向けたのを一瞬確認した後、私を捕えた熱の方向へ一直線に歩き出した。

なんでスーツなんか着てんのよ!?

熱を放出していたのは、馴れないスーツに身を潜めた鷹臣に間違いなかった。

私は接近するにつれて小走りになり、やがて身動きひとつ取れない鷹臣にいいよ近寄る。

けれど私は止まらなかった。

その代わり、擦れ違い様にひとこと、彼にメッセージを残したのだ。

「黙ってついてきて……」

私の可愛い仔猫ちゃんは犬みたいに尻尾を振って付いてくるだろう。

案の定、鷹臣だけが持つ甘さと、ほのかに芳るブルーの香りが私の背後にふわっと舞って、振り向かずとも柔らかな風が運ぶその香りに、彼の存在を確かめる事が出来た。

平井さんの目も届かなくなっただころで、私は近くのカフェに入り、トールサイズのミルクティーを頼んだ。

本当はカフェラテが良かったけれど、鷹臣がお腹を空かせていたらと思い、カフェインは控えておいた方が良いと判断したのだ。

ハチ公みたいな仔猫ちゃんは不安な目つきで私の精算を入り口付近で待っている。

本当はそんな鷹臣に思いきり抱きついて、鷹臣仕込みの甘いキスをしたいところだったけど、そうはいかない。

「はい。お腹、空いてるんじゃない？スコーンも買ったから食べて？」

ワザと少し怒ったような口調で、ミルクティーとスコーンの入った紙袋を手渡すと、鷹臣は大きく頷いて、まだ熱いミルクティーを煤った。

そんな鷹臣を引き連れて家路への電車に乗り込み、空いている席へ腰を掛けると、鷹臣が不安そうに私の顔を覗き込んで訊いてくる。

「サヨコさん、もしかして…怒ってる？」

「どうして？…ねえ、私のメールみた？」

そっけない私の口調に、鷹臣は眉を八の字にして口を開けたまま、ゆっくりと首を横に振り、泣きそうな顔で私を見つめた。

「じゃあ帰ったら見ないで消去して？絶対よ？そうじゃないと私…」

鷹臣の策略にまんまとハマってる気がするじゃない…？

彼には聞こえないように、心の中で呟いてから小さく舌を出した。

そして、鷹臣のまだ不安そうな表情を確認してから、私は顔を前に向き直してふと、思う。

さっき浴びた視線はまるでカルアミルクみたい。

甘ったるいコーヒークールに、たつぷりのミルク。

やっぱり彼は私のスイーツなんだなあ。

そんな事を考えていたら、本当に呑みたくなってしまう、帰りにコンビニに寄って行こうと勝手に胸を踊らせていた。

そうしたら、鷹臣の握り締めてる紙袋に入っている、まだ手付かずのままのスコーンも一緒に頂けばいいじゃないか。

帰ってからの楽しみに独りで想像を膨らませる私は、玄関を開けたらすぐ、そう思わせた原因に甘すぎる口づけをしてやるう、と密かに企んでいたのだった。

カルアミルク・アイズ（後書き）

ラム酒になって、あなたと混じりあえば…ほら、もっと極上になる。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9875a/>

水蜜桃の在処。

2010年10月20日11時53分発行